

Title	戸に関する一考察：主戸客戸制研究の前提
Author(s)	丹, 喬二
Citation	東洋史研究 (1968), 27(1): 38-64
Issue Date	1968-06-30
URL	http://dx.doi.org/10.14989/152762
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

戸に關する一考察

——主戸客戸制研究の前提——

丹 喬 二

一

まず小論の意圖するところを述べておきたい。筆者の最近の問題關心は佃戸・自作農といった小農民の具體的な存在形態を明らかにすることにあるが、その場合それら小農民と國家權力との關係がどのようなものであったかを知ることが、一つの重要な課題になることはいうまでもない。そしてその際、さけて通ることのできないのが主戸客戸制の問題である。

ところで、その主戸客戸制に關する研究は、主戸を地主・自作農、客戸を小作人とした加藤繁説^①以後現在に至るまで大きな變遷をたどっている。すなわち、周藤吉之氏^②は客戸の中には佃戸の外に雇傭人が含まれており、また主戸は地主・自作農の外に自作兼小作及び小作農（佃戸）が含まれていることを解明され、また柳田節子氏^③は國家權力の滲透度と地域差との關連で、寛郷において有田無稅戸が客戸として把握されていることを明らかにされた。そして以上のような諸研究をうけて、問題を大きく展開させたのが草野靖氏である。^④

草野氏は、(1)主戸客戸は國家の編籍上の制度であり、戸籍法・稅役法について主戸客戸の實態が捉えられねばならない。(2)何故に唐中期頃から主戸客戸の制度が生まれまたそれが宋一代で姿を消したのか、その理由が明らかにされねばならない、とし、次のように述べる。まず主戸・客戸を分ける基準は本籍地に居住するか否かだけであり、本籍地に居住す

るものが主戸、他郷に寄寓するものが客戸であり、客戸も主戸と同様に戸籍上とらえられた編戸である。そして當時にあっては登籍¹¹立戸名の際に田産の所有が必要であり、従って主戸も客戸も田産所有者であり、税役上においても兩者の間には大した差別はなく、兩税は主客負擔、徭役は主戸は職役・夫役負擔、客戸は夫役だけが時によっては職役も負擔する。客戸のもつ田産は一般に荒田であり従って納める税も荒税と呼ばれるものであるが、一定期間以上そこに住みまた荒田が熟田化するに従って、客戸は主戸に編入される。要するに主戸・客戸を分つ基準ははじめ本籍地居住者か否かだけであつたが、戸籍法が税役法と密接に関連していることによつて、資産對應見居地課税という兩税法の原則が一層貫徹され、居住が本貫にあるか否かという點に對する顧慮が薄れるにつれて、主戸客戸制は消滅する。また佃戸については田産を持たないから當然戸名をたてられず、主家の名下に附されたいわば戸下の戸であり、國家の兩税・徭役も全て負擔しない。以上が草野氏の見解であり、これに對し、中川學氏¹²は同じような視角から客戸の寄寓地附籍が公認される過程を具體的にあつづけている。

ところでこのような草野氏の見解に對しては、二つの反論がなされている。一つは岡本雅博氏¹³からで、岡本氏は特に草野氏の客戸から主戸への轉附ということについて史料批判を加えながらそれを否定し、主戸客戸を分つ基準はあくまでも本籍地のものであるか否かだけであり、それは共同體による「よそ者」的差別と關係があるだろうとされた。また佃戸については特に言及されていないが、草野氏の説を肯定しているようにもとれる。もう一つは柳田節子氏¹⁴からで、柳田氏は特に草野氏の佃戸理解について灌園集の記事から佃戸も獨立の戸名をもち、また國家の身丁錢、鹽茶の科敷錢などを負擔しているとされた。

本稿は柳田氏の提言をうけて、特に草野氏の佃戸理解について、はたして佃戸は地主の家に附籍され國家から獨立の戸としてとらえられていなかったのかということについて、草野氏の所論に即して考察することを一つの目的としている。何故に筆者が佃戸に執着するかというと、それは先に述べたような社會經濟史的な關心もあるが、それとともに、後述す

るように、税役・主戸客戸制などの解明は、佃戸に焦點をあてなければ十分にその意義が明らかにされないと考えるからに外ならない。

以上のような意圖の下に、小論は具體的には主戸客戸の前提をなす「戸」について考察しようというものである。まず戸の検討から入りたいと思う。

二

宋刑統卷第十二戸婚律の第一門は脱漏増減戸口疾老丁中小で、その最初の條は、

諸脱戸者、家長徒參年。無課役者、減貳等。女戸又減參等《謂壹戸俱不附貫。若不由家長、罪其所由。卽見在役任者、雖脱戸及計口多者、各從漏口法》。

とあつて、更に、

議曰 率士黔庶、皆有籍書。若壹戸之内盡脱漏不附籍者、所由家長、合徒參年。身及戸内並無課役者、減貳等、徒貳年。若戸内並無男夫直以女人爲戸而脱者、又減參等、合杖一陌。注云、謂壹戸俱不附貫、此文不計人數、唯據脱戸、縱壹身、亦爲壹戸、不附、卽依脱戸、合徒參年。縱有百口、但壹口附戸、自外不附、止從漏口之法。若不由家長、謂家長不知脱戸之情、罪其所由、家長不坐。卽見在役任者、謂身見在官驅使而戸籍無名、雖脱戸、從漏口法。卽見在役任、卽無課調《釋曰、課調見在役令》、若壹身脱戸、合杖陸拾、及計口多者、從漏口法。漏有課口、罪止徒參年、漏無課口、罪止徒壹年半。

とある。すなわち士人・庶民にはみな籍書^①戸籍^②があつて（「率士黔庶、皆有籍書」）、ここに脱戸ということが問題となつてくる。脱戸というのは一戸のうち全て脱漏して戸籍に附さないもので（「壹戸俱不附貫」「壹戸之内盡脱漏不附籍」）、その場合の罪は、戸内に課役ある者がいる時には所由と家長が徒三年、いない時には二等を減じて二年、女戸の場合には

杖一百である。^⑨ここから戸というのは國家によってとらえられた一つの單位であるということがわかる。^⑩

では戸とはどういう單位なのであろうか。戸の責任者が家長と呼ばれているところからみて、戸は家と關連があることがわかるが、宋會要食貨六、墾田雜錄に、

(紹興)二十九年十二月十六日、直敷文閣淮南東路轉運副使魏安行言、淮東州縣閑田甚多。今欲勸誘民戶增廣力田、先次條畫下項。一……有能招誘人戶、十家耕田三頃者、支錢四十貫文。一百戶耕田三十頃者、支錢四百貫文。二百五十戶耕田七十五頃者、白身與補進義副尉、不願就名目者、支錢一千貫文。大率每招到一戶耕田三十畝者、支錢四貫文、以次第增添。

とあるように、一戸を招誘して田三十畝を耕したものに錢四貫文を與えることとし、人戶十家耕田三頃は四十貫文、一百戸耕田三十頃は四百貫文というように、倍數ごとの賞格を定めているが、ここからうかがえるように、戸と家とは同じ意味で使われている。人戶十戸といわずに人戶十家としたのは、おそらく語呂が悪いためであらう。そしてそのほかのものが戸としてとらえられているのは、先にも見たように、戸というのが國家からみた正規の呼び方であることを示している。

このような例はほかにも見られる。續資治通鑑長編卷一百六十八、仁宗皇祐二年六月乙酉の條に、蜀民歲增曠土盡闢、下戸才有田三五十畝或五七欠(十)畝、而贍一家十數口。一不熟、即轉死溝壑。

とあって、この一家は下戸としてとらえられている。また宋史卷一百七十三、食貨上一、農田の條には、

太宗太平興國中、兩京諸路、許民共推練土地之宜明樹藝之法者一人、縣補爲農師。令相視田畝肥瘠、及五種所宜、某家有種、某戸有丁男、某人耕牛、即同鄉三老里胥、召集餘夫、分畫曠土、勸令種蒔、候歲熟、共取其利。

とあって、文意から某家、某戸、某人が同じものとしてとらえられている。この某人の人はおそらく家長であらう。^⑪

明代においてはどうかであつたらうか。明律の註釋書を参考にしよう。明律卷第四の戸律一、戸役、脫漏戸口の條の「凡

一戸全不附籍」の註釋に次のようにある。まず撰人不詳の新刻律條告示活套卷上に、

今訪得、所屬州縣人民多有奸巧之徒、不以版籍爲重、或將全家潛躲、而脫其所立之戸、或將子孫隱瞞、而漏其所成之丁。脫漏之弊日滋、戸口之數日減、則糧差何自而出。

とあって、脱戸の説明に、全家を潜躲してその立つる所の戸を脱すといっている。また雷夢麟の讀律瑣言（嘉靖刊）卷第四に、

瑣言曰、計家而言謂之戸、計人而言謂之口、一家全不附籍者、謂之脱戸。^⑧

とあって、家を計りてこれを戸というたあり、更に一家全て附籍しないものを脱戸というといっている。また陳遇文の大明律解（萬曆刊）卷三には、

一家曰戸、人丁曰口、籍謂冊籍、附籍謂附寫人丁於冊也。^⑨

とあって、一家は戸というたある。更に撰人不詳の大明律直引増註比附條例釋義假如（萬曆刊）卷之三には、

據一族而言曰戸、據一人言曰口。

とあって、一族（家族）によりて言えは戸というたある。また大明律例註釋招擬折獄指南戸律卷之三には、

家謂之戸、人謂之口、一家全不附籍、謂之脱戸。

とあって、ここでも家はこれを戸というたあり、また一家全て附籍しないことを脱戸というたある。更に民國時代の資料にも同様の記事がみえる。『中國農村慣行調査』第一卷家族篇第一號河北省順義縣沙井村、十一月十八日、家に、^⑩

一戸一戸の長は何と呼ぶか「家長」である。

一戸一戸の長は「家長」と呼ばれるが上からは（縣の行政機關の方ではの意）「戸長」である。

とある。以上あげた諸例から、戸と家とは同じものであり、戸というのは家を上からとらえた場合の呼稱であることは明らかであろう。

では家とは何であらうか。家は家族から構成されているが、その家族とはどういう家族なのか。戸と家との関係を更に考察しよう。宋會要食貨六、經界に、

（紹興十五年）二月十日、王鐵言、被旨差委措置兩浙經界。除將前後已得指揮參照外、今措置下項。……一比來有力之家、規避差役科率、多將田產分詭名挾戶、至有一家不下析爲三二十戶者、亦有官戶將階官及職官及名分爲數戶者、鄉司受倖得以陰庇。先措置經界、雖令人戶自陳首併、往往尙有頑猾未曾盡併之家。

とある。このうちの特に「至有一家不下析爲三二十戶者」とあるところから、次のことがわかる。まず一家＝一戸であるということのほかに、(一)家は同財^④ということと密接に關連している。(二)その家が家産分割をしないで（「不下析」、三二十戸とすることは違法である、ということである。

まず、(一)については、宋史列傳第二百十五、孝義に、

方綱、池州青陽人、八世同爨、家屬七百口、居室六百區、每旦鳴鼓會食。嘗出稻五千筭、賑貸貧民。景德二年、轉運使憑亮以聞、詔旌其門。天禧中、侍御史韓億安撫江南使還言、綱家稅籍、錢四百餘千、米二千五百斛、同居四百年、而本縣科率、一無寬假。望蠲其戶雜科。詔從之。

とあって、八世同爨、家屬七百口の綱家は、一つの家、一つの戸としてとらえられている。すなわち家というのは同居同産している血縁集團（「八世同爨、家屬七百口」）^④からなる一つの生活單位であり、同時にそれが戸としてとらえられていることは、以上によって明らかである。^⑤

このように戸と家とは同じものであるが、しかし次のようにそれと違った場合も考えられてくる。今度は戸の方から考察しよう。宋刑統卷十二戸婚律、父母在及居喪別籍異財居喪生子の條に、

諸祖父母父母在而子孫別籍異財者、徒參年《別籍異財不相須。下條准之》。

とあり、更に、

議曰 稱祖父母父母在、則曾高在亦同。若子孫別生戶籍財產不同者、子孫各徒參年。注云、別籍異財不相須、或籍別財同、或戶同財異者、各徒參年、故云不相須。下條准之、謂父母喪中別籍異財、亦同此義。

とあって、祖父母父母が生存している場合、籍を同じくし財産を共にすべきものとされている。そして「或父母兄弟不相保、抵冒法禁、折而入下戸」（續資治通鑑長編卷二百二十四、熙寧四年六月庚申、劉摯の上奏）とあるように、それを冒して祖父母父母生存中に別籍異財し下戸に入することは嚴禁されている。この「別籍異財」「子孫別生戶籍財產不同者」と籍と財とが對になって用いられているところから、戸というのは直接的な血のつながりと同時に同産を前提としているということがわかり、これは先の家の考察の場合と一致するのであるが、ところが「注云、別籍異財不相須、或籍別財同、或戶同財異者、各徒參年」とあるところから、現實には、戸籍が別であるが財が同じ、あるいは戸籍が同じで財が異なる場合もあったようである。しかしこれらは禁止されており、普通は戸は同居同産を前提としていたといつてよいことは、今まであげた諸例によっても明らかである。だがこのように考えると、家をどうとるかによって現實の戸と家との關係も違つたものになる。まず家を戸としてつかまえたものとするときくまでも一戸一一家であるが、家を同居同産の血縁集團からなるとすると、まず一戸一一家の場合（これが普通）、更に非合法なもので一家二復數の戸（「或籍別財同」）の場合、あるいは一戸二復數の家（「或戶同財異」）の場合が存在することになる。そして歴史的にみて重要なのは經營二家計經濟を營む現實の生活集團であるから、後者の類別こそが重要となる。事實、以上の例は祖父母父母生存中の場合であるが、それ以外にも、このようなことをめぐって戸籍上種々の問題がでてくる。それが詭名挾戸と相冒充戸である。

まず一家二復數の戸の場合が、先にあげた(二)の詭名挾戸である。今まで見てきたように祖父母父母生存中に別籍異財することは禁止されているが、宋刑統卷十二戸婚律、相冒充戸の條に、

即於法、應別立戸、而不聽別、……主司杖壹陌。

とあって、更に議に、

議曰 應別、謂父母終亡服紀已闕兄弟欲別者、……而主司不聽者、各合杖壹陌。

とあるように、父母なきあと服喪の期間が過ぎて兄弟が欲すれば別籍異財することは合法的であり、無論欲しないものは同居同産が可能であるが、前掲の宋會要に「比來有力之家、規避差役科率、多將田產分詭名挾戶、至有一家不下析爲三二十戶者」とあるように、家產分割しないで一家を三二十戸とするものもあり、これは詭名挾戶として禁止されている。がこれからみれば、現實にある程度行なわれていたようである。

もう一方の一戸に複数の家にあたるのが相冒合戸である。これは差役の類を避けるために、血縁的なつながりの薄いものあるいは無いものが有力戸などと戸を合して一つの戸籍に入ること、宋刑統卷十二戸婚律、相冒合戸に、

諸相冒合戸者、徒貳年。無課役者、減貳等《謂以疎爲親及有所規避者》。主司知情、與同罪。

とあり、續いて、

議曰 依賦役令、文武職事官參品以上若郡王期親及同居大功親伍品以上及國公同居期親、並免課役。既爲同居有所蠲免、相冒合戸、故得徒貳年。無課役者、或藉資蔭、贖罪事、既輕於課役、減貳等、得徒壹年。注云、謂以疎爲親、律令所蔭、各有等差、若以疎相合、既失戸數、規其資蔭、卽失課役、如斯合戸、得此徒役。若蠲免更多或假蔭重者、各依本法、自從重論。主司知情、與同罪。主司謂里正以上、知冒戸情、有課役無課役、各與同罪。

とあって、課役をのがれるために、課役を負担する必要がない戸と戸を合すること、宋代では官戸などと合戸する場合である。これがある程度行なわれていたことは、次の史料によって明らかである。袁氏世範卷三治家、冒戸避役起爭之端に、

人有已分財產、而欲避免差役、則冒同宗有官之人爲一戸籍者、皆他日爭訟之端由也。

とあって、差役を免れようと同宗の官戸と相冒合戸する者がおり、これをいましめている。これは「人有已分財產」「皆他日爭訟之端由也」とあるところからみると、籍は同じで財は別であったと思われる。また王邁の臞軒集卷一、乙未館職

に、

中等之戸、例受抑配、或數人而共爲一戸、若盡科之、則貧者立見流離、或一家而析爲數小戸、若不科、則富者得以苟免、貧富既有不均之患。

とあって、中等の戸が抑配を避けるために、數戸が合して一戸となすものがいたのである。²⁸⁾

ともあれ、祖父母父母生存中の籍と財との相違、あるいは詭名挾戸、相冒合戸などの場合があるが、これらは禁止されており、たてまえとしてはそして普通には戸と家とは同じものであったといえよう。

さて次に家長について一言しておこう。宋刑統の父母在及居喪別籍異財の續きに、

若祖父母父母令別籍及以子孫妄繼人後者、徒貳年、子孫不坐。

とあり、更に、

議曰 若祖父母父母處分令子孫別籍及以子孫妄繼人後者、得徒貳年、子孫不坐。

とあって、別籍についての祖父母父母に對する規定を述べているが、別籍とならんで、「以子孫妄繼人後者」とあってみだりに家長の地位をつがせることは徒二年の刑に處せられる。従つて家長には祖父あるいは祖父なきあとと父がなつたものと思われる。²⁹⁾

ところで、宋刑統の先の脱戸の條の續きに、

脱口及増減年狀《謂疾老中小之類》以免課役者、壹口徒壹年、貳口加壹等、罪止徒參年。

とあって、漏口と年狀の増減に關する規定がでており、續いて、

其増減非免課役及漏無課役口者、肆口爲壹口、罪止徒壹年半。卽不滿肆口、杖陸拾《部曲奴婢亦同》。

とあって、不課役口についての規定がなされているが、先の脱戸の場合と同様、いずれも罰せられるのは家長である。³⁰⁾すなわち、家長が戸内の家族員及び「部曲奴婢」(「部曲奴婢亦同」とあるところから、彼らはその家の戸籍につけられてい

たことになる^⑨)に對する責任をもつものであり、國家は戸を家長を媒介にしてつかんでいたのであり、このことは宋會要食貨七十、賦稅雜錄に、

太祖建隆四年詔、毎週起納稅賦、告諭人戶、赴指定倉庫送納。初限已前、未得校料、中限將終全未納者、追戶頭、或次家人。令佐同共校料、不得闕禁、及各行校料。

とあるように、稅賦の督促にはまず戸頭(家長)を追するとあることによつても明らかである。

以上の考察から明らかなように、たてまえとしてはそして普通には戸と家とは同じものであり、家が直接的な血のつながりと財を同じくする家族からなる一つの生活單位であるのに對し、戸というのはそれを國家權力が上からとらえたものであり、更には家長は同時に戸の代表者であつて、國家は家長を媒介にして現實に戸を把握していたことになる。

このように家はこれを戸というところから、家を構成するものは當然全て戸としてとらえられていたと思われるのであるが、この點佃戸はどうであつたろうか。はたして家を構成していたのだろうか。ところで一方、草野氏によれば戸名をたててには田產を持つことが必要であつたという。直接に佃戸の問題に入る前に、まず草野氏のいう立戸の條件の檢討を行なつておこう。

三

草野氏は、佃戸が獨立の戸名をたてられず地主の戸籍に附籍されていたとする主要な論據に三點をあげておられる。以下順をおつて檢討しよう。

第一點は、宋會要輯稿の選舉・鄉兵義勇保甲、續資治通鑑長編などの田產を所有し戸名をたてていたという記事をあげ、登籍^⑩立戸名の際、田產の所有が必要であつたこと、従つて編戸はみな田產所有者であり、田產を持たない佃戸はそれから除外されていたことを主張する。しかし私は、現在問題になっているのは立戸の條件として田產の所有が必要であ

るかないかにあるのであるから、田産の所有によって戸名をたてる例をあげても、それは田産を持つことが立戸の十分條件であることの証明にはなるかも知れないが決して必要條件であることの証明にはならない、と考える。この點はきわめて重要である。というのは、草野氏は文獻上の明らかに佃戸を示すと思われる客戸を、以上の理由から制度上の客戸ではないとして捨て去るからである。五峯集卷二、與劉信叔書五首に、

自主戸至于客戸、遞相聽從、以供王事、不可一日廢也、則豈可聽客戸自便使主戸不得繫屬之哉。夫客戸依主戸以生、當供其役使從其約束者也。而客戸或稟性狼悖、不知上下之分、或習學末作、不力耕桑之業、或肆飲博而盜竊、而不聽檢束、或無妻之戸、誘人妻女而逃、或丁口蕃多、衣食有餘、稍能買田宅三五畝、出戸名、便欲脫離主戸而去、凡此五者、主戸訟于官、當爲之痛治、不可聽其從便也。

とあって、この史料の客戸は明らかに佃戸であり、草野氏は先の理由からこれを制度上の客戸ではないとしているが、しかし草野氏の主張の論據が不十分であることがわかった現在、更にこの文に續いて、「而不可不聽客戸之從便、則有一焉。夫貴以賤爲本、高以下爲基者也。是以雖天子之貴、保民如保赤子、況主戸之于客戸、皆齊民乎」とあるところから、この客戸も制度上の客戸であると理解するのが最も妥當であらう。因みに、文獻上の客戸と制度上の客戸、實態概念としての客戸と制度概念としての客戸、を峻別せよという場合、それは確かに事實なのであるが、と同時に制度はあくまでも現實に基礎を置いているということが常に念頭におかるべきではないか。

第二點は、晦庵先生朱文公別集の記事からみちびきだされた、佃戸は地主の家に附籍されており、客戸は田産所有者であるが一般には家計の補充のため富家の田地を租借していた、という點である。まず當の史料を全文掲げよう。

晦庵先生朱公別集卷第九、取會管下都分富家及闕食之家、

(A) 契勘、管界久闕雨澤、田禾旱損。使軍已行委官措置、招誘客人與販米斛、蠲免力勝雜物稅錢、禁戕減剋牙錢之弊、勸諭前來出糶、目今日逐有米不闕。軍司亦已行帖都建昌縣、及委官依使軍所行措置、招誘客米赴縣住糶、及勸諭上戸、

將所有米斛、相各逐鄉村開倉、依時價出糶、應接民間食用去訖。切慮、向去富實戶將米斛停頓不行出糶、使細民闕食不便。合行立式、預先委官取會管下都分蓄積米穀上戸及闕食之家、如后。七月十六日。

(B) 某都共幾家

一富家有米可糶者、幾家。除逐家口食支用供贍地客(佃客?)外、有米幾石可糶鄉例糶數、開客(各)姓名米數并佃客地

一富家無餘米可糶者、計幾家。而僅能自給、其地客佃客不闕、仍客開戶姓(名?)并佃客地客姓名。

一中產僅能自足而未能盡贍其佃各地客者、計幾家開戶名、取見佃客姓名所闕之數。

一下戸合要糶米者、幾家。

作田幾家。各開戶名。大人幾口、小人幾口別經營甚業次。

不作田幾家。各開戶名。大人幾口、小人幾口經營甚業次。

作他人田幾家。各開戶名。係作某人家田。大人幾口、小人幾口兼經營甚業次。

(C) 右件如前。並是着實、即無隱漏、其闕食之家、亦無詐冒重疊。仍五家結一保、如將來使軍委官審實挑覆、却有不實去處、甘伏重罪不詞。

この史料の背景を説明しよう。朱熹は淳熙五年十二月に四十九歳で知南康軍として赴任し、同八年閏三月に提舉江南西路常平茶鹽公事に除せられて東歸するまでの三年間この南康軍を治めたが、同六年六月からはちようど起こった旱傷の對策におわれ、その有様が別集卷九・一〇、文集卷一六などにのせられており、この別集卷九所收の取會管下都分富家及闕食之家は同六年七月十六日に書かれたものである。南康軍は星子縣、建昌縣、都昌縣の三縣を領し、星子縣に軍治が置かれていたが、(A)においては、まず星子縣の對策が既に成り、續いて建昌縣・都昌縣に對する處置に着手したのであるが、先の星子縣で郷村の富實戸が米穀を停頓して出糶しないという實情に會い、今度はその弊害を預め除くために、管下都分の米穀を蓄積する上戸及び闕食の家を取會することを述べたもので、その取會の形式が(B)の部分である。

草野氏は(B)の部分を掲げて、そこから二つの結論を出されている。(一)は富家・中産の下地客・佃客は戸名がなく主家の戸名下に附記して申告され主家を通じて賑恤米を受けているとし、第三點で検討する戸下の戸と關連させて、地客・佃客(＝佃戸)が地主の家の戸籍に附されていることの一證左としてることであり、(二)は下戸の項の「作他人田幾家」は客戸であり、客戸というのは田産をもつが一般にこのように家計の補充のため他人の田地を租種するもの、とされた。

私見によれば、この史料はそうにはとれないと思う。ではどう讀むのが正しいのであろうか。結論を先にいえば、下戸の「作他人田幾家」には中産の下地客・佃客が入るということである。

先にも述べた如く、旱傷の對策として現在の穀物の保有状態と關食の家がどの位あるかを調べるのであるが、その場合先に富實戸が米穀を出糶しないことがあったのにかんがみて、今度は富實戸の手持ちの米は全て出糶させなければならぬ。そしてこの時にその前提となるのが、富家は當然のこととして地客・佃客の世話をするということである。従つてはじめの富家は自家用分と地客・佃客の分(「逐家口食支用供贍地客(佃客)」を各戸の姓名、佃客・地客の姓名を書き出させることによって確認し、それを手持ちの米數とつきあわせることによって(「開客(各)戸姓名米數并佃客地客姓名」)、出糶分として幾らあるかをおさえる(「有米幾石可糶」)。

次の富家は、同じようにして、自家用分と地客・佃客分で手一杯で出糶分がないもの(「富家無餘米可糶者」)である。更に次の中産は自家用分だけで精一杯で(「中産僅自足」)、その佃客・地客を贍することができない(「而未能盡贍其佃客地客」)もので、その場合には中産の戸名を記すと同時に、贍せられない佃客・地客の姓名及び闕くところの米數を明らかにする(「開戸名、取見佃客地客姓名、所闕之數」)。

最後は糶米を必要とする家で、自作農(「作田幾家」、農業以外で生計をたてている家(「不作田幾家」)とともに、先に中産によって救済されなかった佃客・地客(「作他人田幾家」)がくる。このようにして現在の穀物の保有状態(出糶分)と糶米を要する家とを確認しようというもので、中産によって世話されない佃客・地客は當然この「下戸合要糶米者」の

中に入るのである。そうすると何故に地主の家の下に佃戸の姓名が記されているかは自ら明らからであらう。それは決して地主の家に附籍されているからではなく、まず地主が出糶分を隠すのを防ぐためであり(①)の「並是着實、即無隱漏」、更に佃客・地客が一方では地主から米を借り他方では官の世話で糶米するのを防ぐためである(②)の「其闕食之家、亦許冒重疊」^③。この間の事情について朱子年譜は、秋七月再奏南康軍旱災と九月申請修築沿江石堤の間の大修荒政で次のように述べている。

朱子年譜卷之二、大修荒政に、

〔年譜〕是夏大旱、盛夏中、禱祠山川、卻蓋暴露、蔬食踰月、恐懼憂勞、無頃刻暇。至秋計苗失收七分以上、乃竭力措置、爲荒政備。首諭小民安分著業、以待賑恤、毋得輕有流移、令主戶各存恤其客戶、有餘米平價、以濟鄉閭。其有措借出放、亦許自依鄉例、將來填還不足、官司爲責償。如有違令閉糶者、當根究施治。其貧民妄行需索、鼓衆作鬧、定當重作行遣。

とあって、今までの筆者の解釋を補ってくれる。これによると富家・中産は主戸、その下の地客・佃客は客戶とされており、従ってこれによっても佃客・地客はとうてい地主の家に附籍された存在とは思えないのである。

以上のような解釋が正しいものとするならば、下戸の「作他人田幾家」は中産の家の地客・佃客としての客戶であり、^④彼らは當然家を構成する(「闕食之家」「作他人田幾家」とともに戸名をもっており(「下戸」「各開戸名」)、獨立の戸としてとらえられていたといわねばならない。

なおこれと関連して、草野氏の(二)についてである。草野氏は「作他人田幾家」を自分の田産をもつものが副業として他人の田を借りて耕作しているものとされているが、兼ねて、甚なる業次を經營するか(「兼經營甚業次」とあるところをみれば、これが本業であり、副業として行商などをやったものとしかたれない。これは「作田幾家」が別に、甚なる業次を經營するか(「別經營甚業次」)、「不作田幾家」がただ甚なる業次を經營するか(「經營甚業次」とあることによっても明ら

かである。

第三點は戸下の戸についてである。第二點と關連させて、草野氏は佃戸が地主の家の戸籍に附籍されていわゆる戸下の戸として存在していたことを述べられ、次の史料をあげている。

通制條格卷第二、戸令、

戸例 至元七年八月、尙書省戸部、據各路見取勘不當差戸計、協濟見當差人戸。於内析居戸計、若戸長與戸下戸、俱願析居、別無定奪。中間却有戸長願戸下不肯從順、戸下願戸長却不從順。議得、見欽奉聖旨條格、壬子年合併抄上戸計、自願析居各另者、聽從民便。欽此。所據壬子年同籍同姓叔姪弟兄之類、若有析居另居者、呈准尙書判、照依下項事理、施行。

一、同姓叔姪弟兄、壬子年同籍至今同戸同居當差者、止合依舊一戸當差。如有兩願析居者聽。

一、同姓叔姪弟兄、壬子年同籍異居同戸當差、雖是異居、未經分者、兩願析戸者聽。

一、同姓叔姪弟兄、已有支析文字并另書、或無文字已經分另異居者、雖壬子年同籍一戸當差、不以戸長并戸下、自願析戸者聽。

とあって、析居する戸で、戸長が戸下の戸とともに析居を願う者は別に問題がないが、なかには戸長が願ひ戸下が従うを肯じないもの、逆に戸下が願ひ戸長が肯じないものがあり、これをどう處置するか論じたもので、その解答が後の三項である。草野氏はこれをもつて佃戸＝戸下の戸（地主の家に附籍されている戸）とされたわけであるが、一體に戸自體が國家によってとらえられた一つの單位であるのに、その戸の下にまた戸があるとはどういうことなのか。しかしこの史料を熟讀すれば明らかのように、これはまず同姓の叔姪弟兄などの血縁的なつながりをもつ家の析居であり、第二に戸下の戸というものが永續的に存在するものではない、ということに注意しなければならない。現在は一戸として當差されているもので、戸長も戸下もともに析居を望んでおり、當然これ以後は析居して獨立の戸となるので、それを假りに戸下の戸と

いったに過ぎない。従って草野氏のいうようにはとれないと思う。

以上三點にわたって草野氏の主張を検討したのであるが、それによって、草野氏の、立戸の條件は田産所有であつて佃戸は獨立の戸名をたてられず地主の戸籍に附籍されていた、という點に關する見解は成りたないといえよう。というよりはむしろ、晦庵先生朱文公別集などからみて、佃戸も獨立の戸として戸名をもち國家によつて把握されていたことがわれるのである。^④

四

南宋末元初人の方回の古今攷卷之一八、附論班固計井田百畝歲入歲出に、

予往在秀之魏塘王文政家、望吳儂之野、茅屋炊煙、無窮無極、皆佃戶也。一農可耕今田三十畝、假如畝收米三石或二石、姑以二石爲中、畝以一石還主家、庄幹量石五以上、且曰納主三十石、佃戶自得三十石。五口之家、人日食一升、一年食十八石、有十二石之餘。予見、佃戶携米或一升或五七三四升、至其肆、易香燭紙馬油鹽醬醃漿粉麩麵椒薑藥餌之屬不一、皆以米準之。

とあつて、佃戸は三十畝の田を地主から借りて六十石の歳收を得、三十石を主家に納め、自ら三十石を得る。五口の家で一年に十八石を食し、残りの十二石を少しづつ携えて肆に行き、香燭・紙・馬油・鹽醬などとりかえてくる。このように佃戸は主家とは別の經濟を営み、従つて財も別であり、五口の家とあるように王文政家（主家）とは異なつた獨立の家をなしているのである。^⑤ このことは夷堅甲志卷第九、花果異に、

吾家田明鈔本作佃人汪、二十一、家、鏤内現金色蓮花、有僧立其上、自四月八日至十日不退。とあるところからも明らかである。

このように佃戸は直接的な血のつながりと財を同じくする家族からなる獨自の家を構成し、いうまでもなく一般には地

主とは血のつながりもない。従つて第二・第三節の考察から國家によつて獨立の戸として把握されていたことは明らかであるが、この點を更に積極的に論證しよう。とはいつても、それを直接に示す史料が少ないので、ここでは別の觀點からの考察を試みたいと思う。

既に第二節において述べたように、戸は現實には家長を媒介にして國家に把握されていた。もし假りに佃戸が地主の家に附籍されていたとすれば、國家と佃戸との關係はあくまでも主家の家長を媒介にした間接的なものに外ならないはずである。國家と佃戸との關係が間接的なものか直接的なものか、このような視角から兩者の關係を探ってみよう。宋會要食貨五十八、賑貸下に、

(乾道)二年二月三日、兩浙路轉運判官姜誥言、浙西州縣災傷、民戶闕食。乞下諭州軍府官守臣疾速措置、其闕食民戶、量行賑濟、勸諭田主豪右之家、借貸種糧。詔令浙西提舉常平官相度措置。

とあつて、闕食の民戸に對して田主豪右の家に種糧を貸すように圖っているが、この闕食の民戸には明らかに佃戸が含まれており、彼は獨立の戸として國家から直接にとらえられている。このような例はほかにも數多くみられる。例えば、宋史卷一百七十三、食貨上一、農田に、

(寧宗)嘉定八年、左司諫黃序奏、雨澤愆期、地多荒白。知餘杭縣趙師恕、請勸民雜種麻粟豆麥之屬。若種稻則費少利多、雜種則勞多獲少、慮收成之日、田主欲分官課、則非徒無益。若使之從便雜種、多寡皆爲己有、則不勸而勤、民可無饑。望如所陳、下兩浙兩淮江東西等路、凡有耕種失時者、並令雜種、主毋分其地利、官無取其秋苗、庶幾農民得以續食、官免振救之費。從之。

とあつて、民(佃戸)に麻粟豆麥を種えさせ、田主はその租を責むるなく、また官はその賦を收むるなく、農民が續いて食を得、官が振救の費を負擔するを免がれんことを圖っている。また宋會要食貨五十八、賑貸下に、

(嘉定)十六年九月六日、臣僚言……乞諸路監司州郡、將實被災傷去處、遵從條例、日下疾速差官巡行檢視、或因雨

水浸沒風潮漂蕩、斟酌輕重、與議蠲減分數、早出榜示通知、不得出違條限、嚴行戒約。所差官吏、務在公心、勿爲姦弊、庶幾佃戶蒙被實惠、得以了還主家之租、不至拖延、實爲公私莫大之利。

とあって、災害の際には國家による直接の配慮の對象とされている。この點、先の晦庵先生朱文公別集の場合と全く同じである。更に宋史卷四百五十六、列傳、孝義に、

侯義、應天府楚丘人、貧無產、傭田以事母。里人有葬其親而遽返者、義母過其冢、泣謂義曰、我死、其若是乎。義乃感激、自誓而不欲言、但慰其母曰、勿悲、義必不爾。咸平中母卒、義力自辦葬不掩墳壙、晝則負力築墳、夜則慟哭柩側。妻子困匱不給、田主曹氏哀憐之、資以餼糧。踰年墳間瓜異蒂不連理、又有巨蛇遷其側不暴物、野鴿飛而不去。嘗遇盜劫其衣服、既而知是義物、悉還之。

とあって、この侯義は「貧無產、傭田以事母」あるいは「田主曹氏哀憐之、資以餼糧」とあるところから佃戸であると思われるが、このように彼は佃戸でありながら、孝義列傳にのせられその直接の顯彰にあづかっている。この點、先の五峯集の「況主戸之于客戸皆齊民乎」の佃戸があわせ考えらるべきであらう。

以上、國家と佃戸との關係を主として賑恤を中心に見てきたのであるが、次にそれと裏腹の關係にある稅役の收取關係をみることにしよう。

建炎以來繫年要錄卷一百七十四、紹興二十六年九月戊辰の條の潼川府路轉運判官王之望の上奏に、

人戸詭名寄隱產業。有田者無戶、有戶者無田。差某等充戶長、催驅稅賦、率皆代納。以此破家者甚衆。

とあるように、戸には田をもたないものがあることがわかるが、このことは先の晦庵先生朱文公別集卷九、取會管下都分富家及闕食之家に、

一下戸合要糴米者、幾家。

作田幾家。各開戶名。大人幾口、小人幾口

別經營
甚業次。

不作田幾家。各開戶名。大人幾口、小人幾口、經營甚業次。

作他人田幾家。各開戶名。係作某人家田。大人幾口、小人幾口、兼經營甚業次。

とあることも符合する。すなわち既に述べた如く、佃戸（「作他人田幾家」）も家を構成すると同時に客戶としての戸名を持っていたのであるが、この佃戸及び自作農（「作田幾家」）とならんで、「不作田幾家」というように土地所有・保有からはみだされた家があつて、彼らもまた戸名を持っているが、次の例からうかがえるように、彼らは國家の賦税を負擔していたようである。夷堅甲志卷第三、萬歲丹に、

徽州婺源縣懷金鄉民程彬、邀險牟利、儲藥害人。多殺蛇埋地中、覆之以苫、以水沃灌、久則蒸出菌蕈、采而曝乾、復入它藥、始生者以食、人即死、恐爲累、不敢用、多取其次者、先飼蛙、規其躍多寡、以爲度。美其名、名爲萬歲丹。愚民有欲死其仇者、以數千金密市之。嘗有客至、欲實毒、誤中婦翁、翁歸而悟、已不可救。彬有弟曰、正道雅以爲非、不敢諫、至徙家避諸數十里外。彬既老、始悔不復作、稍用僞物代之、藥既不驗、遂無售者。既死、貧甚、唯一子丐食道亡、其後遂絕。嘗有里胥督租、以語侵彬、彬怒、毒而飲之、胥行未幾、腦痛嘔血、亟反臥其門、大呼乞命、彬汲水飲之、即愈。蓋有物以解其毒也。

とあり程彬は藥の製造と販賣によつて生計をたてており、その積極的な證言がないので田は持っていなかったものと思われるが、「有里胥督租、以語侵彬」とあるところから、國家に賦税を納め、里胥の督促をうけていた。^④

もう少しはつきりした例を示そう。晦庵先生朱文公文集卷十三、延和奏劄三の貼黃に、

臣續訪聞、紹興府雖蒙指揮住催官物、而春夏之間、官吏多已先期催足、民戶實未盡露聖恩。今體問得、本府人戶合納丁鹽錢丁身折帛絹折帛綿本色絹本色綿五項、不以有無產業物力、一丁並納九百餘錢、來春即起催、飢餓之餘、實難供納。臣愚欲望、聖慈將來年合納錢數、預行蠲放、庶幾官吏無以作弊、下戶實被聖恩、有以慰安民心。感召和氣、伏候聖旨。

とあつて、紹興府の戸の納むべき丁鹽錢・丁身折帛絹・折帛綿・本色絹・本色綿の五項は、産業物力の有無に拘らず、一丁毎に全て九百餘錢を納めることになっている。従つて産業物力のない佃戸あるいは藥製造販賣者もまたそれらを負擔してはたはずであり、彼らは下戸と呼ばれていたのである。また建炎以來繫年要錄卷一百五十九、紹興十九年六月癸亥の條に、

左朝請郎趙善瑛、知封州代還、論廣東諸州田稅、不足歲用、自祖宗以來、不問有無田產、常計丁、歲納身米、以補常賦。每有收免丁者、於見納米人、均增均減、其法甚備。

とあつて、廣東では田稅だけでは歲用に足りず、開國以來、田產の有無を問わずに、常に丁を計つて身米を納めさせ、常賦を補っていた。従つて、田產を持たない戸があつて、彼らもまた身丁米を納めていたことは明らかであらう。

このように田產をもたないものも賦稅を納めており、従つて彼らは當然のことながら國家の版籍に入っていたことになる。南宋の寧宗頃の人、鄭興裔の鄭忠肅奏議遺集卷上、請禁民不舉子狀に、

蓋自軍興以來、戸口凋殘、貪吏奸胥、又復肆其凌虐、丁鹽紬絹誅求無藝、愚蠢小民、寧殺子而不願輸稅。臣欽奉聖恩、提刑福建路二載、於茲聞見所及、慘狀不可名言。竊見、陛下軫恤斯民、每奏大辟、曲求生路、赤子何知忍、令戕害至此。臣謹準本朝律令、故殺子孫二年、所宜申嚴禁、令下四州守臣、告民法律曉示禍福、召人告官、審實以犯人家財給之、客戶兼責成地主、除飭屬禁戕外、合恭請指揮申嚴、仰望陛下留神省察速賜施行、庶生齒漸繁、戸口日衆、綿國祚億萬年無疆之福、不勝至幸。

とある。丁鹽紬絹の誅求のため、小民は生れてきた子供を殺しても輸稅を願わないのであるが、「客戶兼責成地主」とあつて、これら小民の中には客戶が含まれ、且つその客戶は地主との對でのべられているところから佃戸であることは言を俟たないが、彼らは「庶生齒漸繁、戸口日衆」とあるように戸籍に把握され、國家の戸口統計にとらえられていたのである。

五

以上數節に互つて考察してきたことを簡単にまとめよう。たてまえとしてはそして普通には戸と家とは同じものであり、家が直接的な血のつながりとともに同居同産する家族からなる一つの生活單位であるのに對し、戸というのはそれを國家權力が上からとらえたものである。當時、鄉村内には田産を所有する地主・自作農のほか、田産をもたないものが少なからず存在した。彼らの大部分は佃戸として地主から田を借りて耕作し（鄉村小民、其間多是無田之家、須就田主討田耕作」晦庵先生朱文公文集卷一百、勸農文）、また他のものは何らかの業次を經營して生計をたてていたが、彼らはいずれも家を構成し、そして國家から戸として把握され、その税役を直接に負擔すると同時に、災害の際には賑恤の對象とされていた。すなわち、立戸の條件は決して田産所有にあるのではなく、佃戸をはじめとする田産を持たないものを含めたあらゆる家族（農業を基幹とする何らかの生計を營んでいる）がつまり家が全て戸として把握されるたてまえになっていたのである。もし假りに佃戸と地主とが同一の戸籍に入っていたならば、それはおそらく相冒合戸として取締りの對象となつたであらう。

ところで、そうはいっても、彼らは決して單に抽象的に戸としてとらえられていたわけではなく、宋代においては現實には主戸・客戸として把握されていた。今まで見た史料によると少なくとも佃戸の多くは客戸としてとらえられていたようであるが、しかし草野氏が明らかにされた如く、客戸の中にも物力を持つものがおり、こういったことを含めて、主戸・客戸制がいかなるものか、どういう基準で——つまり税役のためか共同體のためかなど——設定されたのか、更にこの制度が地主佃戸制にとっていかなる意味をもつのか、といったことを明らかにするのは今後の課題である。私はどちらかというと主戸・客戸制は草野氏のいわれるように税役上の問題としてとらえるべきであると思うのであるが、とした場合、租庸調↓兩税法↓一條鞭法↓地丁銀という税制の變化の總過程の中で地丁併徵への傾斜との關連で追求すべきであり、その

場合、土地はなく丁のみを持つ佃戸に焦點をあててこそその意義が十分に明らかにされるのではないかと考えている。^⑨

註

① 唐宋時代の主戸客戸制研究については、中川學「唐・宋の客戸に關する諸研究」(『東洋學報』四六ノ二、一九六三)を参照されたい。

② 加藤繁「宋代の主客戸統計」(『史學』一二ノ三、『支那經濟史考證』上所收、一九三三)。

③ 周藤吉之「宋代の佃戸・佃僕・傭人制」特に「宋代の佃戸制」の補正を中心として(『中國土地制度史研究』、一九五四)。

④ その論據については註②参照。

⑤ 柳田節子「宋代の客戸について」(『史學雜誌』六八ノ四、一九五九)。

⑥ 草野靖「宋代の戸口統計上に所謂客戸について」(『史淵』七九、一九五九)、「宋代の主戸・客戸・佃戸」(『東洋學報』四六ノ一・二、一九六三)。ここでは後者を中心に紹介する。

⑦ 中川學「唐代の客戸による逃棄田の保有」(『一橋論叢』五三ノ一、一九六四)。

⑧ 岡本雅博「宋代の戸籍上の客戸について」(『東方學』二八、一九六四)。

⑨ この點については必ずしもはっきりしない。氏は「草野氏が『登籍』立戸名の際、田産の所有が必要であった」、従って編戸は皆田産所有であった(『東洋學報』四六ノ一)と述べているのは納得できる。しかし田産を得ることが一つの條件にな

っていたとしても、……戸籍上の『客戸』が凡て田産所有者であったわけでもないし、また主戸がすべて土地所有者であったわけでもない」といい、また「新たに編籍される場合の條件としては、兩税負擔の對象となる資産―主として田産―を所有することが必要であったことは、前述のように宋代においても變りない」(前掲論文七〇・七一頁)とされている。あるいは、編籍の場合には主として田産を所有することが必要であり、一度編籍されたものが田産を失っても主戸は主戸、客戸は客戸にとどめおかれ、従って大部分の佃戸ははじめから編籍されなかった、という意味であろうか。

⑩ 柳田節子「宋代國家權力と農村秩序―戸等制支配と客戸―」(仁井田陞博士追悼論文集第一卷『前近代アジアの法と社會』上所收、一九六七)。また前掲「宋代の客戸について」を参照。

⑪ 宋刑統は太祖建隆四年(九六三)に判大理寺贊儀らが上って頒行したもので、その内容は唐の開元二五年の律疏を中心としたものであるが、これが宋代に頒行された背後にはそれを施行する條件が宋代にもあったからという意味で、宋代の史料として使用する。なおその不備を補うために、明律及びその註釋書の一部を参考にしたいと思う。

⑫ 唐宋の戸籍については、仁井田陞「唐宋法律文書の研究」第二編第一章戸籍、曾我部靜雄「日唐令による戸籍計帳と宋代戸籍の源流」(『社會經濟史學』一四ノ六)などを参照。

⑬ 明律には、その卷第四、戸律一、戸役、脫漏戸口に、「凡一

戸全不附籍、有賦役者家長杖一百、無賦役者杖八十、附籍當差」とある。

⑭ たとえば加藤繁氏の「宋代の戸口」をはじめとする一連の論文(『支那經濟史考證』下所收)参照。また小山正明「明代における税糧の科徴と戸則との關係」(『文化科學紀要(千葉大文理學部)』七、一九六五)では、明代國家の基本的把握對象が戸にあったことを述べている。

⑮ このほか戸が家と同じものとして使われている例として、後掲の庵庵先生朱文公別集卷九、取會管下都分富家及闕食之家、を参照されたい。

⑯ 明律の註釋書については田中正俊氏の御教示を仰いだ。なお前掲小山論文を参照。

⑰ 董裕・大明律例註釋祥刑氷鑑(萬曆刊)、蘇茂相・新刻大明律例臨民寶鏡(崇禎刊)にも同文の記事がみえる。

⑱ 袁貞吉・大明律集解附例(萬曆刊)、徐昌祥・大明律例添釋旁註(萬曆刊)にも同文の記事がみえる。

⑲ 同書二二八頁。

⑳ 同財すなわち同産が家計を一にするとところから同時に同居を意味し、またそれが同爨という言葉で表現されることについては、清水盛光『支那家族の構造』二六二・二六三頁を参照。

㉑ この家屬七百口のなかには、非血縁者として奴婢が含まれていたかも知れない。奴婢については後述。

㉒ 仁井田陞『中國法制史』(増訂版)に、「中國の家族は、經濟を共に營み、夫婦親子及びそれをめぐる近い血縁を中心とした血族集團である」(一八七頁)、「家族の共産生活は爨(かま

ど)を共同にし一つの鍋兒(かま)の飯を食うことであり、火と食と居とを共にすることであって、『同居同財』は禮記の時代に『同爨』という言葉であらわされ、『火食を分たざる』状態として六朝期の梁つまり六世紀の書物(文選)にも見え、明代小説の醒世恒言では合鍋兒喫飯一つかまのめしを食うーといっている。これに反して家族共同生活の分裂即ち『異居異財』は爨や火を異にし、これを分つことであり、異爨とか分爨とか異煙とか分煙とか析煙などといわれる」(二二二頁)とあるのを参照。

㉓ 一見すると、家は住居のことを指しているように思われるが、決してそうではない。住居は普通には「舍」(夷堅丙志卷第八、衡山民)とか「屋」とかいわれるが、夷堅丁志卷第三、謝花六に「吉州太和民謝六、以盜成家……家居大屋、而多棲止高樹上」とあるように家と住居とは一應別箇のものであり、従って「乾道三年、江西大水、瀕江之民、多就食他處。豐城有農夫、挈母妻并二子、欲往臨川。道間過小溪、夫密告妻曰、方穀貴艱食、吾家五口、難以偕生、我今負二兒先渡、汝可繼來、母已七十、老病無用、徒累人、但置之於此、渠必不能渡水、減得一口」(夷堅丁志卷第十一、豐城孝婦)のように、住居から離れて流亡中のものも「家」をなしているとされている。すなわち、「家」は家族からなる一つの生活のまとまりをいうものといえよう。滋賀修三『中國家族法の原理』を参照。

㉔ 財と戸とが對應することは、趙鼎・家訓筆錄の第十三項に、田産既不許分割、卽世世爲一戸、同處居住、所貴不遠墳塋。とあることによって知られるが、それがまた家といわれている

ことは、同家訓筆錄に「右三十項、恐太繁、更在臨時擇而行之、大應是止應田產不許分割、每歲計口分給約束、應本家所有田產、並不許分割、每歲據所入計口分給」とあることによって明らかである。

25) ただこのような禁令があること自體、祖父母父母生存中に子孫によって別籍異財が行なわれていたことを推測させる。しかし分れて出てきた子孫の家は同居同産し、獨立の戸として把握されたことになる。なお、宋刑統卷十二戸婚律、父母在及居喪別籍異財の「若祖父母父母令別籍及以子孫妄繼人後者、徒貳年子孫不坐」の議に、「但云別籍不云令其異財、令異財者、明其無罪」とあり、祖父母父母のイニシアティブで異財することだけは許されている。この場合には戸は同居していいことになる。この點については儒教倫理などを考えなければならぬであろう。記して後考に俟つ。

26) 詭名挾戸については、周藤吉之「宋代の詭名寄産と元代漢人の投獻―佃戸制との関連に於いて―」（『東洋文化研究所紀要』第九冊、一九五六）及びその註1にあげられた諸論文を参照。なおそこにおいて詭名挾戸にはこの外いくつかの例があることが明らかにされている。

27) 明代の相冒合戸に關する規定は、明律卷第四、戸律一、戸役脫漏戸口の條に、

若將他人隱蔽在戸不報、及相冒合戸附籍、有賦役者、亦杖一百、無賦役者、亦杖八十。若男男居親屬隱蔽在戸不報、及相冒合戸附籍者、各減二等、所隱之人、並與同罪、改正立戸、別籍當差。其同宗伯叔弟姪及壻自來不曾分居者、不在此限。

とある。

28) 家長の任務は、「家長總治一家大小之務、凡事令子弟分掌、然須謹守禮法以制其下、其下有事、亦必咨稟而後行、不得私假、不得私與」（鄭太和・鄭氏規範）とあって一家大小の務を總治することであり（宋刑統卷十二戸婚律、卑幼私用財、を参照）、その家長に普通最年長者がなることは「諸位中以最長一人主管家事及收支租課等事務、願令已次人主管者聽、須衆議所同乃可」（趙鼎・家訓筆錄第三項）から明らかである。なお普通は女人（趙鼎・家訓筆錄第三項）が家長になれないことは、前掲の宋刑統、脫漏增減戸口の議に「若戸内並無男夫直以女人爲戸而脫者、又減參等、合杖壹陌」とあるのを参照。

29) 續く、里正及び州縣に對する規定の項では、この家長に對する規定を「家長法」といつている。

30) 奴婢・部曲が主家の戸籍に附籍されていたことについては、仁井田「唐宋法律文書の研究」第二篇第一章戸籍第四節部曲及び奴婢の戸籍、を参照。このようにたとえば奴婢は獨自の戸を形成しえないが、従ってまた通常家をも構成しえないことは「僕訴無衣婢、訴飢、老妻終日不開眉、十年待得齊瓜熟、又似齊瓜未熟時」（許應龍・東澗集卷十四、自嘆）とあって主家の經濟の中に包攝されており、また「其家僮僕」「家妾」（夢溪筆談卷九、人事一）、「家僕」（夷堅乙志卷第十七、宣州孟郎中）などといわれて主家の家のものとされ、更にまた家産・資産といわれている（宋刑統卷十二戸婚律、卑幼私用財、戸絕死産、及び同卷十三戸婚律、典賣指當論競物業）ことからもうかがわれる。

③① 仁井田前掲書に、「戸主は家長を以て之に當てるものであって、一戸の代表者であつた」(七三三頁)とある。

③② 清王懋竑纂訂・朱子年譜卷之二。

③③ 輿地紀勝卷二十五、江南東路、南康軍。

③④ この場合まず問題となるのが「作田幾家」以後の文とそれより前の文との関連である。換言すれば、「作田幾家」「不作田幾家」「作地人田幾家」が下戸の具體的な内容を示すのか、それとも富家・中産・下戸の全體の合計を示すのか、ということである。後者であるとなると、當面の緊急の問題である糶米を要する家が幾家として家數のみしか出てこないし(下戸の戸名と大人・小人の口數は、富家・中産の姓名をおさえた残りのものというように、間接的にしか出てこない)、それはまた表題の富家と闕食の家とを取會するということにも反するので、これは明らかに前者である。つまり旱災の救済にまず必要とされるのが、現在どの位の米數を要するかを知ること、そのためには糶米を要する家とその口數を調べることが(「大人幾口、小人幾口」)要求されるのである。この點については別集卷十、行下米場具糶過米式、行下各縣抄節戸口并立支米數正數、を參照。

③⑤ このことは晦庵先生朱文公文集卷一百、勸農文に、

一、鄉村小民、其間多は無田之家、須就田主討田耕作、每至耕種耘田時節、又就田主生借數米、及至終冬成熟、方始一併填還。佃戶既賴田主給佃生借、以養活家口、田主亦藉佃客耕田納租、以借贍家計、二者相須方能存立。今仰人戶遞相告戒、佃戶不可侵犯佃主、田主不可擄虐佃戶。如當耕牛車水之

時、仰田主依常年例應副數米、秋冬收成之際、仰佃戶各備所借本息填還、其間若有負頑不還之人、仰田主經官陳論、當爲監納以警頑慢。

とあつて、地主・佃戸は相互依存的なものとされていることがもうかがえる。

③⑥ このことは、別集卷十、審實糶濟約束に、

各郷有營運轉業興盛之家、其元給曆頭、合行追取。若雖有些小店業、買賣微細、不能贍給、已請曆頭、不合追回。如有似此未係抄節之人、亦請。今隅官保正從實根括施行、毋至泛濫。

各郷上戸地客、如主家自能贍給、合行追收、如主家見闕食、不能贍給、雖是地客、亦合給曆。如有似此之人、卽請、隅官保正、從實根括、毋致泛濫。

とあり、またその前條に、「有富來不應抄節、際實有營運物業之家、及上戸自能贍給地客見執使軍曆頭之人、仰隅官保正、追收繳納」(同卷、施行闕食未盡抄節人等事)とあるように、賑耀には曆頭を給するが、地主に贍給された地客が曆頭を受けた場合追収する、とあるところからも明らかである。また地主に對して何とか出糶させようとしていることについては、たとえば同卷、再行下三縣勸諭到上戸賑耀不許抵拒事、などを參照。

③⑦ 朱子年譜の原序は南宋の魏了翁が書いている。

③⑧ このように解釋すると、下戸のなかに主戸・客戸の兩者が入っていることになるが、このような例はほかにも見られる。宋史食貨志上一、農田に、

（淳熙八年五月）是歲連雨、下田被浸。詔兩浙諸州軍、與常平司措置、再借種糧與下戶、播種毋致失時。

とあるが、宋會要食貨五八、賑貸下には、

淳熙九（八）年五月十六日詔、近者久雨、恐爲低田有傷貧民無力再種。可令浙東西兩路提舉常平官同諸州守臣疾速措置、於常平錢內取撥借第四、第五等以下人戶收買稻種、令接續布種、毋致失所。

とあって、先の下戸はここでは第四・第五等以下の人戸とあり、當然その中には客戸も入っていたといわねばならない。この點については、後掲の晦庵先生朱文公文集卷十三、延和奏劄三、貼黃を參照。

なお晦庵先生朱文公別集のこの項は、從來は、「作他人田幾家」は下戸（主戸）であると解釋され、主戸の中にも土地をもたない佃戸がいたことの一證據とされていた（周藤吉之「宋代の佃戸・佃僕・傭人制」特に『宋代の佃戸制』の補正を中心として）、柳田節子「宋代國家權力と農村秩序―戸等制支配と客戸―」。この史料がそうでないとすると、主戸の中にも佃戸がいたことを示すと思われる殘る史料は、筆者の知るかぎりでは、A「甲内某人係上戸、見係第幾等戸、曾不應役、人丁若干、某人係下戸、作何營運、或租種是何人田畝、人丁若干、某人係客戸、元係何處人氏、移來本鄉幾年、租種是何人田地、人丁若干、某人係官戸、是何官品、曾不係析戸」（宋會要食貨六十六、免役、開禧元年七月二十七日の條）、B「嚴州言、乞先將本州第五等戸無產之人丁鹽絹數蠲減……嚴州將第五等無產稅人戸四萬一百九十六丁合納丁鹽絹、與放免一年」（宋會要食貨十二、

身丁、乾道六年三月二十四日の條。なお呂東來先生文集卷一、爲張嚴州作乞免丁錢奏狀、を參照）の二例が存在することになる。

③⑨ たえば洪邁・夷堅支景卷第五、鄭四客に、

鄭四客、臺州僱居人、爲林通判家佃戸。後稍有儲羨、或出入販賣紗帛海物。淳熙二年、偕其僕陳二、負擔至摘星嶺。とあるのを參照。

④⑩ 戸下の戸が便宜的な用語であることは、大元聖政國朝典章、戸部卷之三、戸計、分析では、

抄數分房者聽 至元七年八月、尙書戸部、近據太原路申、見取勘不當差戸計、協濟見當差人戸。於內析居戸計、若戸長與戸下、俱長却不從順、乞定奪事。省部議得、見欽奉聖旨條畫、壬子年合併戸計、自願析居各另者、聽民便。欽此。呈奉到都堂鈞旨、擬定下項析居戸體例照依施行。（以下通制條格と同文）

とあって、ここでは戸下の戸という語が使用されていないことからもうかがわれる。

④⑪ 小論は草野氏の問題點のみを取り上げる結果になったが、草野氏の論點は決してこれにつきるわけではなく、主戸客戸制を戸籍上・稅役上の問題として追求せよとするなど注目すべき提言がなされており、小論はこれらの點を積極的問題にしえなかったが、しかし、草野氏のその戸籍上・制度上の問題として追求するという方法論を繼承している。

④⑫ この點については、註③にあげた晦庵先生朱文公文集卷一百、勸農文を參照。

④③ 無論、脱戸の場合にはこの限りではない。

④④ 宋史卷三十九、本紀寧宗三には簡略に、

（嘉定八年）六月丙辰詔、兩浙江淮路、諭民雜種粟麥麻豆、

有司毋收其賦、田主毋責其租。

とある。

④⑤ 藥の行商によつてのみ生計をたてている例は、夢溪筆談卷

九、人事一の杜生的事例を参照。

④⑥ この租が里正の個人的な租ではなく官の賦税であることは、

たとえば「輸租得鈔官更催、踉蹌里正敲門來、手持文書雜嘖喜、

我亦來營醉歸耳、牀頭慳囊大如拳、撲破正有三百錢、不堪與君

成一醉、聊復償君草鞋費」（石湖居士詩集卷三）とあることか

らも明らかである。

④⑦ これら五項の税は、この貼黃の本文に、「諸郡荒歉、人戸日

有流移、一切官物、不堪催理。其紹興府人戸夏税、已蒙聖慈、

等第免閭閻住催」とあつて夏税とされている。夏税秋苗の嚴密な

内容の検討は今後の課題である。

④⑧ 役の問題についても今後の課題とせねばならないが、とりあ

えず、草野氏もあげられている史料であるが、宋會要食貨七

十、賦稅雜錄、熙寧四年十月六日の條に、

又準京西轉運司牒、於諸縣鄉村主客戸、均差夫二千四百八十

人、開修古淳河。

とあつて、佃戸（客戸）も夫役を負担していたことになる。

④⑨ 家族員の數は様々であり、前掲の脱漏増減戸口の議に、「注

云、謂壹戸俱不附貫、此文不計人數、唯據脱戸、縱壹身、亦爲

壹戸、不附、即依脱戸、合徒參年。縱有百口、但壹口附戸、自

外不附、止從漏口法」とあることからもうかがえるように、少

ないものは一口、多いものは百口から更には數百口（前掲の宋

史孝義列傳方綱の例）いたことになる。

⑤⑩ 東京教育大學中國社會經濟史研究會「中國史の世界史的

把握はどう進んだか②——中世史研究の課題」（歴史評論一八六、

一九六六）。（一九六八・四・二七）

「東洋史研究」バックナンバーのお知らせ

第二二卷一號	二〇〇圓	第二四卷四號	三九〇圓	第二六卷一號	二七〇圓
第二二卷四號	二〇〇圓	第二五卷一號	二七〇圓	第二六卷四號	三九〇圓
第二四卷二號	二七〇圓	第二五卷二號	二七〇圓	総目録	會員 四〇〇圓
第二四卷三號	二七〇圓	第二五卷三號	二七〇圓	非會員 六〇〇圓	
				送料各三〇圓	